

## 鷺の灯

泉鏡花作

—

「旦那、旦那ッて雨戸の外で呼んだです。旦那は  
可いが三聲めには、書生さんの旦那と恚うです、剽  
輕な爺で年紀は五十六だと言ひました。」

御維新前能樂が盛な時分には其の爺鷺流の狂言師  
だつたさうで一時火の消えたやうに成つたのが頃日  
大層な勢で流行出したから、諸流の月並の會の太郎  
冠者は勤りさうなもの、片田舎の湯宿なんぞに、夜  
番をして居なくつても可ささうなものだが、いづれ  
其の昔も前座・・・いや、お待ちなさい。  
狂言師に前座は可訝い、あゝ、何とか言ひます。」

「アトだの小アトだのといふのがあるんですが。」  
と私は榊原が話しはじめた、齋念の湯の奇き物語、  
渠が容易に打明けなかつたのを聞く嬉しさに、それは  
／＼しなから、

「はあ、成程、して其の親仁は・・・。」

「姓は何といふんだか、鬪泉宿の女中等は、甚吾爺さん／＼と言つて居ました。いかにも其の小アトぐらゐな處だつたのでせう。けれども此のお話では決して小アトでない。シテの方です。既に其時の如きも、一所に不思議を試さうと言ふの、私を誘ひ出しに來たのですから。」

尤も刻限に成つたら、聲を懸けて呉れ、出懸けたいと、日の中約束がしてあつたんですから、私も寝ないで待つて居ました。

逗留をした座敷は八番、下座敷で、尤も齋念の湯宿は平家造です。然も唯一軒。」

湯も岩から湧く温泉ではないと言ふ。四方青田の丘の、何其の屋敷跡一ヶ所、草の中に鼓子花に交つて黄なる防風の咲く砂地があつて、雪解の後、雨上り、不圖すると六月の早續き、村々水論がはじめらうと言ふ時分、清水がむく／＼と草の根を白く洗ひ、眞砂を透過して颯々と流れる事などがあつたゝめ、土地の人々、鎮守の神の御手洗と稱へて、靈水と呼んで、水の氣の無い時も、小さく竹垣を結つて、注連を繞らしたが、一歳秋のはじめ齋念寺の鐘樓が震れて、傾く途端に撞木が觸れて、巨鐘が自然に鳴つ

た、地震このかた、この清水噴出で、玉を聯ぬるが如く絶えず、然も手に掬ぶと温く感ぜられたのである。

即ち町方の資産家、件の空地を所有した便宜に、分析して、萬病に利ありと言ふより、世のため、人のため、村繁昌のため、こゝに浴場を起すに就いて、土地の者聊か異議なく、先づ板囲の假普請で、仕切のない、二十軒長屋のやうな、縦に長いのが一軒出来た。

常時も榊原は其の冷泉に遊んだことがある。小兒連れ夫婦の人にともなはれたが、妻女は五つに成る兒を負つたまゝ、俾も要せず、主人は瓢を腰にぶら／＼歩行きで、越前の國福井の市のはづれから、近い二里。田圃路を馬士づれに行く途中、掛茶屋の軒、石地藏の背後、土橋の袂などに一五六ヶ所、齋念經克と白抜に、黒旗が樹つて居て、凡ての光景、開帳の如く、客も在郷連が多數を占めて、然も未だ出来立の萬事整はず、瓢で酒を持參だから、夕飯も柁で何合と極めて炊かせ、三國捲から賣りに来た、鯛を一馬、三枚におろして、潮と刺身と鹽燥と、指圖して料らせて、半日の清遊、部屋代ぐるみ總計二歩に

満<sup>み</sup>たざる勘<sup>かん</sup>定<sup>ぢやう</sup>、其<sup>それ</sup>でも上<sup>うへ</sup>様<sup>さま</sup>と言<sup>い</sup>はれたのであつたが、  
此<sup>こ</sup>の二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>目<sup>め</sup>に榊<sup>さかき</sup>原<sup>はら</sup>が行<sup>い</sup>つた時<sup>とき</sup>は、既<sup>すで</sup>に茶<sup>ちや</sup>代<sup>だい</sup>の請<sup>うけ</sup>取<sup>とり</sup>が、  
活<sup>くわつ</sup>版<sup>ばん</sup>で出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>て居<sup>ゐ</sup>たと言<sup>い</sup>ふのである。

「私の居ました部屋は、ずらりと二十八九枚、汽車が通るやうに並んだ雨戸の、通縁の middle に、餘り長い間だから兩端の他に別に戸袋が一つ拵へてある、丁ど其の際で、譯なく、人に知らさないで開ける事が出来るのです。

是が幸ひと言ふのは、一體其の晩甚吾爺に誘はれて出掛けるのが、貴方の前ぢや些と大人氣ないですが、一所に不思議な事を見ようため、就いては、夜中にがた／＼雨戸を開けなぞして、人に怪まれると、悪いからと、豫め甚吾が注意をしたので、それぢや本人、何うかといふと、いや、大臆病。夜巡りをする度に幾度驚かされて、わあ！と尻餅をつくか知れない。婦人小兒ぢやなし、聲を揚げて助船とも人殺とも、喚いて救を呼ばれない丈に、尚苦しいと、晝間、顔を合せた時、愚癡を並べたから起つた事です。

全體私湯治に参つた時は、其の數の多い兩側の部屋に、客と言つたら精々二組、三相ぐらゐ。十日ばかり逗留をした間に、湯殿で出會したのは六十餘り

の老人一人、其も無口な人物で、言を懸けることも  
しなかつた、恐しく寂れたもので、尤も長逗留に通  
した處ではない、三國港まで海は二里以上行かねば  
ならず、御嶽が目の前に聳えて、木の芽峠中の河内  
が累り合つて居ますけれども、手拭を提げて上られ  
る譯ぢやなし、眞個の族籠の一軒建、村までも十町  
餘それさへ、生魚一尾あるのぢやないでせう。通り  
過ぎると、直に輻井の町です。

温泉の四方は残らず田圃です、退屈もするだらう  
ぢやありませんか。

春秋の彼岸詣、御命講、十夜の次手なぞに町から  
日歸り、一夜泊の客は多いですが、夜分は盛時でさ  
へ寂寞する、殊に私の居たのは五月雨の頃でせう。

随分風變りなればこそ我慢もしましたが、いや實  
際大徒然、仰向けに成つて讀む書物にも飽いて、日  
の中、うと／＼所在なしに轉寢をするから、夜にな  
ると一時を打つても寐られないので始末が悪い。

灯は暗し、貴方、じと／＼降板續ける、宵から雨戸を閉めるでせう。一件の列車戸だ、凡そ小半時、がら／＼がら／＼がら／＼と遣るですな、もう其の遠くから繰り込んで来る板の隙間の、宵闇の空を覗いて、あら、又夜が来ると、欺息をする次第。

（御退屈様。）と入つて来る女中でも話相手に成る事か、此の方至極御退屈の寢床を伸べて、匆匆に引退ると、日一日、茶は飲み飽きる、手を敲いて湯沸の用はなく、發奮がないから酒は飲まず、呼び寄せて酌させるでもないから、四五人居る女中等、實に御客様を嘗めた話で、ばツたん／＼と夜延に機を織るんです。

遠くの方でね。

そら、寢床と同時に行燈を引替だ、四角くツて、圓くツてト判じ物のやうな灯せう。乗つ、反つ居ない蚤まで突くやうな氣がして、腹這になつて、薄暗い廣間に一人、目を皿のやうにした工合は、前世の宿業かと思はれます。

其の中煙草の火は消える、老人の客は咳をする、  
兩は降る、二の音は陰に籠る、鼠が騒ぐ天井を睨め  
上げると、油皿が圓く薄ぼんやりと一杯に映つて、  
熟と見て居ると、燈心が二筋、やがて油がじり／＼  
といふと、其の影が開いたり、すぼんだり、これが  
揺々して水が流れるやうに成ると、又うつる丁子が  
全然船の形。

「



「其は何うも、其處で何か出たですか。」

「否、これは唯徒然の餘りのお話をしたゞだけで、其の燈心の二筋の影が、大きく分れて映る時、天井が口を開たやうな中から、鐵漿を點けた色の蒼い女の顔が出たなどいふのぢやありません。」

と榊原は笑ひながら、  
 「然し黒天井の燈心も、まんざら縁のない話ぢやないので。さあ、寐るには寐られず、起きてるのはつらし、退屈なり、自分で身體を持餘す、こゝで毎晩同一時刻に、一時毎十二時からはじめて、カチノ拍子木を打つて廻るのが甚吾爺。」

其の拍子木の音が、廊下盡の、宿の勝手口と納屋の間と思ふあたりで、チヨンカチと聞えると、それから三步ぐらゐづゝ間を置いちや、カチカチと打ちカチカチと敲きながら、雨戸の外を次第に枕頭へ、近づいて來るんです。

やがて私の部屋の外で、一ツカチノと遣つて通

り過ぎる、それから木の音が段々に遠ざかつて、此の廊下はづれへ行つたと思ふと、小さく冴えて、後の森へ響いて聞えなくなるのですが、毎晩でせう。

又是が一時置きに同一音で、大抵物置の邊からはじめて、森の處で行留りに聞えなくなるまで時間が極つて居りませう。寐られなくつて所在無さに困つて居る者の耳には、何れほど便りになしつたか知れません。

拍子木のカチノノとカチノノの間々には寐床に匍匐になつて、行燈の灯を熟と頼杖で眺めながら、其の夜巡の歩行つきを考へて見たり、ざあノノ雨の音の聞える時は、蓑笠で居るだらうと思つて見たり、時とすると、木を合圖に時鳥馬を聞きます。然ういふ時は夜巡が立停つたらうと思つたり、果して雨戸の外でも足を留めたやうな氣がするです。

三晩四晩と經つて、例時の刻限、同一時、聞えるなと思ふと、遙にカチノノと言ふ音、さあ歩行出すわ、三步ばかり其處でカチリと打つと言ふ鹽梅です

から、何となく其を聞き／＼寐て居る私自分で夜巡りでもして居るやうな氣になります。然も其時分に成ると、箴の音は勿論、帳場などは謂ふまでもない、他に一組や二組くらゐ客はあつても、部屋が遠くに離れて居るから、いかに寂としても鼾の聲さへ聞えない始末。世の中には夜巡の爺と自分ばかりと考へるほど、急に烈しくざつと蓑を洗つて降る時は見て居る行燈の紙が濡れて私身體に、繖がかゝるやうに思はれる、つい小歇になれば、額を拂つて吻と呼吸をつくといふやうな、毎晩夜巡を勤める心持で明け方になると疲れてうと／＼寐入るのが殆ど連夜で。

其の夜巡をする内に、

「何か變つたことはないか、爺さん、」つて、もしも夜巡をする内に爺が不思議なものでも見たと言へば、直ぐに其を、自分が見たぐらゐな考へで、熱心に尋ねました。丁ど前申す爺と二人で部屋を抜た、何です。然うやつて、雨戸を丁々とやる約束をした時です。

正午些と下つた頃、久しぶりで雨が上つたもんで

すから、いきれの立つ庭前を掃いて居たのを掴へて、  
まあ、爺といふので縁側へ腰を掛けさせて、茶なん  
ぞ注いでぎと、甚吾はかさね手に茶碗を乗せて、背  
後向きに其處ら、夜巡の節、一めぐりする路筋をず  
らりと二しながら、

いやましく、御退屈様《こたいくつさま》  
(で。」「といふ。

(退屈は身勝手で、言つて見りや榮耀の餅の皮と  
かいふんだが、爺さん、お前は嘘。每晚人の寐る時  
分から大抵な役ではないな。 ) 實際また大抵の役  
ではありますまい。」「

四

「先づ老人に喜ばせを言つて、劬ると、額に皺を寄せて、ニヤノノして、下唇でびたノノと茶のあと口を嘗めたです。

（いえ、もし世間には權助と名乗りまして、寺の鐘を撞きますやうに、生れたものさへござりませぬや、私、甚吾と申して温泉宿の夜巡を勤めまするに、屈託も難儀もござりませぬ。

はや、二三年このかた馴れましたで、眠い目も極りがついて、宵の口とろりとやりますると、刻限に覺めまする、直ぐに拍子木を持つて納屋から罷出でまするが、雨も風も苦になりはいたしませぬ。

一體が盜賊の用心、火の用心にまはりますでござりますが、扨て、夜巡が出ると極つて見れば、氣の利いた盜賊の方で用心して寄り着きませず、火の用心とても其の通り、豫て一人一人仗ふほど、氣をつけまする主人なれば、過失もござりませぬが。

あの拍子木の音さへしますれば、此の親仁は居つても、居りませいでも澤山、申さば木を打つ機關親仁、蓑で出まする雨の夜なぞは、我ながら、全の案

山子で脱穀になつた魂は、男部屋に木枕でござりますわ。）

と暢氣なことを言つて、下腹に力を入れてウハ、と笑つたですがね。右の手で、茶碗を片寄せると、左の手を前へ支いて肩を落とし、面のやうな扁い、愛嬌のある顔を、私の胸の處へ差寄せて低聲になりました。

（其の又拍子木が自然に空を飛んで、カチノ、鳴つて歩行いた日には、百鬼夜行の繪巻物の幕明といふ體で容易な事ではござりませぬ。

其に就いてお尋ねの變つた事があるのでござりますよ。

是は、もう、旦那様ゆゑ申しまする、御婦人方や何かにはお話の出来ることではござりませぬ。悚毛をふるうて、勿々當宿をお立退きにもなりますと、寂れました折なり、主人どもに相濟みませぬ。

貴方様は然やうな憂慮もござりませぬで申しまするが、其のかはり眞個にはなさりますまい。

つい一昨晩・・・）  
何の此方から好んで聞いたくらゐです。眞個にするも爲ないもありません。ぐたりとした、身體を揺

直して膝を進めました。」

私も榊原の言に就いて、渠に我が膝を進めたのである。

「然も一昨晩と言つたですもの。得てかやうな事は、話す者の祖父さんが見たとか、伯父さんが聞いたとか、従兄弟の親類が其の朋友から聞いたとか言ふんだのに。」

「ぢやあ其の甚吾といふ夜巡の爺に現在い貴下がお聞きになつた、其の前々日の夜。」

「ですから私氣乗がしたです。」

（爺さん、疑やしない、可いから、譬ひ虚言を言つても眞個にするから話して聞かせな。何か、此の礦泉に主でも棲んで、夜中に其と出會つたとしてもいふのか。）

（然やうなものではござりませぬ。嫌といふほど驚かされたのは一昨日の晩でございますが、毎度度膽を抜かれまするは其の晩に限つたのではないのでござりました。

例年此の五月雨になりますと、五月闇と、申上

げるまでもござりませぬ、黒白も分かぬ、其は其は  
暗いでござりまする。其處で敵めが羽を伸ばして  
酷い目に逢はせるでござりますよ。

え、手前が好ぢやからと申して、直に其の譬を  
持出しまするも、をかしうござりますなれども、入  
相など、水田の中に、徳利が立つた形に、すばりと  
構へて居りまするな、怪體な奴でござります。(

(泥龜か)。(ツテ私は尋ねた。

甚吾爺が、

(青鷺でござりますて、)。「



## 五

「御覽じやる通、此の邊四方青田で、庄屋の森がござります。また森の前に大池がござりますに因つて、地體いかいこと居りまして、……（逗留中は降籠められて、つい居廻へぶら／＼歩きに出掛けることさへしなかつたですが、其の時爺がいふ大池は途中で見ました。源泉は丘のやうな處にあります。其の丘をだら／＼と下りて、立樹を四五本な。

松の高いのを潜ると其處に用水の溜がある。周囲は總體で七八町、北の片隅が深々とした森で、あとは其の樹立の名残が水で流したやうに淺く次第に疎になつて、其の四五本の松といふのも、矢張森の一部なんですが、私を通つた時は、水が満々とあつて、實際よりは餘程渺として見えたですよ。

といふのが雨繞きで溢れた所爲で、汀には恠るすら／＼伸びた葉ばかりの菖蒲、田の畔が二條三條水浸りに沈んで、稲葉の伏倒れた上に乗つて、二人釣をして居たのがあります。殊に黄昏だつたから餘計に廣く見えたのでせう。

のみならず、福井の町を離れてから二里不足の間、唯蜿蜒した田圃路で、處々小橋があるばかり、目につくのは、湯の廣告の黒旗と、石地藏と、藁葺にした肥料の溜桶のうしろに、灸點の、これも旗が樹つて居る、それくらゐなものだつたので、池を見た時は宛然別天地へでも出たやうな氣かしたです。

鰻、鯰、などが澤山に釣れるのだと言つて、水浸りの畔にゐんだのばかりではない、池の眞中に田舟を浮べて、一人類冠をして釣つて居た奴がある。晩方だから其の形煙のやう、舟はじつとして其まゝ沈んで行くやうに動かないで、却つて専葉の浮葉が、誘ひつれ、風に密と寄つたり、分れたり、寂しい事。おまけに左手の汀は、寺でもあつた趾と見えて、苔の生えた石燈籠が、茫乎立つて、墓石がすら／＼と、其處へも水が溢れて居た。空も池もどんよりして、唯見た處は、町も村も國も爰が行止りで、あとは筒抜けに海のやうな野原でゞもありさうな心細い景色が、大いに趣があつたですから、しばらく、腕車を留めて眺めましたつけ。

田舟の中の人の形が、舷へつかまつて、俯向けに水を覗いた。其の状、何の事はない其處から地獄で

も覗くやうで、慄然として直ぐに腕車を急がせたで  
す。爺のいふは其の池ですな。

(何が居る。)

(何とおつしやつて、其の青鷺でござりますて。

.....)

(鷺か。)

何するものぞと、思ふと、爺は早く見て取つた、  
不平らしく。

(鷺かと一口におつしやりますが、旦那様、彼奴、  
徳利の形で水に立ちますだけあつて、此の親仁には  
酒と一ツに、命取りでござります、恐しい。)

と舌を巻くです。唇を反してな。鱗ではあるまい  
し、凡そ世の中に、青鷺のために生命を取らわると  
いふがあるかつて聞いたです。

甚吾爺手拭を掴んで臂を張つた。

(其ぢやに因つて前にも申しました。え、庄屋  
殿の森から大池へかけましては、青鷺が巢でござり  
まして、何時大いこと居りますのが、又此の五月雨  
頃は旬ござりますわ。

や、いづれも名代な奴等、小溝端で蚯蚓を突いて、  
村の小兒に驚かされたり、川下で鮎を狙うて、船を

見て遁げ出すやうな甘いのぢやござりませぬ。

福井の市へ伸して出て、人死のある棟の上でぎや  
ツと鳴いたり、縁切の背戸でぐわツと喚いたり、三  
國港へ飛び歩いて帆柱を揺つたり、したゝかなこと  
を、はたかすでござります。)

甚吾は苦々しい澁面造りで。」

「其の巢が總出で、糧を漁るでござりますに依つて、夜に成ると、大池の岸は首の押せ／＼で、鷺だらけ、嘴を揃へたら何の事はござりませぬ。鳥の國の兵隊が行列をした體、いや夥しい事はお百姓が肥料に取片附けまするので目立たぬのでござりますが、森の中は一夜の中に敵めが糞で眞白に積るのが毎々でござります。何奴も、年功を経て居りまするゆゑ、日中は寂莫、羽音もさせず、潜んで居まして、夜に入つてから暗中を、ぎやつと言つては口から吐き出す呼吸を燃いて其の灯で、何と、鰻を鵜呑み箕で計るやうな大池の魚は、波を立てゝ遁げるでござりまする。

中にもあぶれものが腹こなしに出て來まして、親仁が夜巡の路を二間置き三間置き、五ツ六ツ居る事やら、其とも一羽で幾度もするやら、眞の暗の足許から、ばつと羽振をして起ちますわ。咽喉で呼吸を引いてはアとお前様、魂が天上をいたしますると、其ツ切、物音も聞えぬでござわます。

此方は氣か上づりまして、いやはや、身體が宙へ

上つたかと思ふと、踏出す足もぶらりと下りさうで、  
竦んで一步も動けぬでござりますよ。)

(成程そりや吃驚だな。)

こりや、いかにも驚くでせう。で爺のいふには、  
(初手に啖ひました時は、嘘にも天狗に釣上げられ  
たかと思つたでござります。)

氣味の悪い冷汗で、びつしよりになつて、漸々腰  
を据ゑた、引いた呼吸をウムと詰めましたなり、恐ろ  
歩き出しますると、五間と出ぬに、又ばツと飛び  
ますわ。

此の術で晩方などは、お百姓が、畔で尻餅をつく  
ことがござりまするを、豫て聞いて居りましたに因  
つて、思ひ出して、扱は、おでやつた庄屋の森の脚  
長殿ぢや。

然やうに心付きましたれば太う恐しい事はなく  
になりましたものゝ、其時を初めに毎晩、其が又時節  
になりますと、毎年でござりまする。ちやんと心得  
て巡回りまして、不意を打たれてはぎよツとせぬ  
事はござりませぬ。

おのれ見ると、檜の木の用心棒、六尺手ごろな奴  
を用意しまして、暗の中を透し／＼、此方も夜巡、

目は馴れて來ましたなり、一本脚を搔拂うて、胸中  
ひし折つて呉れうと、毎晩のやうに狙ひますが、  
如何な其の術をくひますか。

まざ／＼と形を見せて、引寄せて置いて、棒が横  
なぐれに空を切るを合圖に、立ちざまに、耳を拂ふ、  
鼻を弾く、嚏は出ます。）

と鼻頭に皺を寄せて、くすぐつたいのを堪へる顔  
色、話に乗つて、縁側に胡坐を組ん握拳が膝につい  
て饒舌つたです。

（これが又毎晩で、馬鹿らしくはあります、泣  
くにも泣かれませず腹が立ちます、をかしさもを  
かしうござりまするわ、一時は夜討の體で、松明を  
持つて出たこともござりますわ、如何様火があれば、  
敵殿いたづらはしませぬが、片手業で、此の拍子木  
を打ちまするに、便が悪うござりますに就いて、又  
暗やみで歩行く、例物が遊びますぢや。

磨つた揉んだが今年になりまして、つい一昨晚、  
五日の夜でござりまする。

お節句に就きまして、帳場から一合下されたので  
ござります。三國鯉のぶつ／＼切で、嘗めますほど  
に、けるほどに、とろ／＼と肱枕、一天四海波を打

治めたまへばと、一寝入りいたしまして、酔覺のば  
ツと目が開きますと、お定まりの刻限。

お造酒がまはつて景氣はついたり、雨も止んで居  
りまする、不圖思ひ出して、恚ういふ時ぢや、狐で  
も來い狸でも來い、人間にかなふ事ぢやないぞ。

おのれやれ、見ろ、年來の意趣ばらしと、先づ身  
支度をいたしたでござります。》 勢づいて話し

たですな。 ー



## 七

「甚吾爺は然ういつて、手拭を扱いて疎めた頂へ引掛けたです。」

（ト拍子木を預けたでござります。多時打棄つて置いた用心棒、提灯を点けて参り、物置の隅から引出しまして、あとを閉めて錠を下して、さて、提灯を吹消すと、勝手の知れた臺所の格子窓に引掛けたでござります。其處で一ツ身構をいたして、拍子木は首へかけたなり棒ぐるみ、咽喉を挟んで力チノと遣りまして、いよ／＼庭傳ひに繰出しましたわ。

これは此の邊のものでござると先づそろりノと参りながら、八方へ目を配つて、丁ど此お座敷の前を通りまして、やがて七八間歩行きますと、そりや敵めの氣勢がいたしますで、盲目打に一番ヤツと横に拂つたでござります。）

此處で何です。私爺の言ふ事が一寸受取れなかつたです。何故と言ふと、先刻お話申した通りで、戸の外を、爺が廻る中は寝たまゝ自分が、一所に夜巡をするやうな氣になつて、其の足の運び方さい、左から右、右から左とまでに信じて居る前々日の夜

中更かきらに變かはりはなく、拍子木ひやうしぎのはじめから聞きこえなくな  
るまで知しつて居あたですけれども、私部屋わたくしへやのさきで氣  
合ひを入れて棒ぼうを振廻ふりまはしたとは、聊いさゝかも胸むねに響ひびかなかつ  
たぢやありませんか。

(爺ぢいさん、話はなしはおもしろいがこしらへたな、)

(旦那だんな。)

(嘘うそをつけ、)と極きめつけるやうにいつて、私思わたくしおも  
はず笑わらうたですな。

(こりや何どうもなりません。こゝまでお聞ききなさ  
れて、はや、疑うたがはつしやりますやうでは、これから  
先さき、其その晩ばんは親仁おやぢが勢いきほひに乗のつて、何處どこまでも追おいつ詰め  
て、せめて、長脛ながすねの爪尖つまさきなと挫くじいてくれうと、打うち  
はづし／＼、つい浮々うか／＼と長追ながおひして、あの大池おほいけの岸きしま  
で參まひつて、どんづまりに水みづをはじいた棒ぼうで、女をんなの据すそ  
を拂はらひますると、手答てしたへなく、煙けむりを突ついたやうな心  
持もち、呀や、青鷺あをさぎに女をんなの裾すそがと、吃驚びっくりして見み上げます  
と、高たかい處ところに眞白まっしろな長ながき顔かほ、目めもなければ眉まゆもない  
のが、荔枝れいしのやうな口くちを開あけて、おはぐるを見みせま  
するで早腰はやこしを抜ぬかして這はひました。

天窓あたまの上うへで別べつの又またしはがれた男をとこの聲こゑで、誰だれぢや！  
と一ひと聲こゑかけられまして、何なにが泥龜どろがめのやうに脚あしを曳ひ

き摺つて、それから一目散に遁げました事を、申上げました處で、根から眞個にはなされずまい。此處がものでござります。何と怗やうなことは、御逗留の、他のお客人に申される儀でござりませぬ。内留の者にも話されませぬが、お見懸け申してお尋を幸ひ饒舌ります次第。

親仁も不思議でなりませぬ。青鷺の、脚を、脚をと狙ひました其の脚がつと女の裾になりましたわ。地體暗で、葦やら蘆やら、柳の葉やら、裾やら、袂やら見分けのつく譯はござりませぬに、小袖の襟を判然見まして、其れに合せるものを着たらしく、ふきの蒼いまで明いほどに認めました。其さへ解せぬでござります、落着いてから考へますと、例の青鷺の吐く呼吸の怪火の光に映つたかとも思はれるでござります。さて何も彼も顛倒いたしましたわ。

其とも、夜中に棒を使うて、青鷺を追かけます親仁が、現に此處に居ります上は、また何と間違うて、其の時分大池の邊を歩行く女中が無いにも限らぬでござります。兎もあれ、今一度、確に見届けたうござりますなれど、なか／＼以て、親仁一人には叶ひませぬ。

御退屈晴しぢや、欺されたと思召して、今夜おつき合ひ下さりませぬか、鷺の儀は、親仁が一流の棒を使ひまして、池まで追ひ立てゝ参ります。何うでござります、旦那様。)

勿論の事！ 其處で約束をしたのであります。」

語りつゝあつた榊原は言を更め、

「酷く大人氣ないやうぢやあるですが、其頃私、一人極の勇士でな、後に目が弱いために目的を變へたですが、未だ陸軍士官學校の試験を受けようと思つて勉強をして居た最中であつたですから、恐れんです。」

否、恐れる恐れんより、のツけから、てんで事實にはしやあせんです、けれども此の剽輕な狂言師が誘ふのだから、よしんば嘘にしても何ぞ趣向があらうと考へたですから、早速承知をしたものゝ晝間見てさへ物凄いやうに感じた大池の岸を、眞夜中に誰が貴方、然も鷺の脚が裾に化するなぞツてお話するもお恥しい。

ですが、．．．．．といひかけ、榊原は私の顔を見て又四邊を■した。時恰も五月にして今宵然る雨肅々旅店の一室に灯更けて、片明りに旅の同伴の、榊原氏の片面暗く、疾しといへる目は却つて美しく輝いたのである。

私は卓子に肱をついて、其の黒き髯ある優しい面

ざしの濃き眉の間に、或ものゝ潜めるをうかゞひながら、對酌の杯を取り上げたが、酒が満ちて且つ冷くなつて居た。下に置くと、彼方は酌をしてくれようとして、銚子を持つたが、齊く無意識であるかの如く差置いた、此景此時、酒を交ふるに違あらず。

渠は直ちに言を繼いで、

「ですが事實であつたですよ。」

再び途絶えようとするから、

「謹聽いたして居ります。」

「甚吾は約束を違へずに來ました。尤も約束を違へた處で、其の時間には、拍子木が鳴るんですから、間違ひツこはありません。」

書生さんの旦那は、直に雨戸を開けたです。

(時間は可いのか、)

「呀！ ようお待ちなされました、頼うだお方」

これを召されまし、) ツて沓脱へ草履を直して呉れたです、草履を直して呉れたは可いが、書生さんの旦那が、今度は頼うだお方と變つたですな、

「勿論、鷺が女に變るんですもの、」

是を聞いて、

「大きにさ、」 といつて榊原氏も私も齊しく笑つたが、恚る中にも室は陰々としたのである。

「又音のしないやうに雨戸を閉めて、庭に出ると、もう爺の形も見えぬ暗さ。

（着たる鎧は黒革の、緘しに緘せる大鎧、草摺長に着なしつる、舊より好む大長刀、眞中取つて打擔ぎ、・・・）

何が大長刀、爺は例の用心棒を掻込んで、今夜も一杯、微酔です、低聲で謠。

（ゆらり／＼と出でたる有様、如何なる天魔鬼神なりとも、面を向く可きやうあらじと、我身ながらも頼母しく、）

カチ／＼と拍子木を入れました。二歩ばかり前に立つたのが、密と引返して、

（叱！ 叱！） と耳へ口で。何も彼も唯察するばかり凡そ暗いたつて程のあつたものだらうと思ふですが、尤も雨戸を閉めてからは、黒白も分かぬといふのです、雨は一降つて居なかつた、其の一寸先も知れない癖に、何か種々、動く、むら／＼とし

たものが、蔽被さつて、墨の流に藻の亂れるやうに、  
目前を襲つて來るので、足がすくみながら、手ばかり  
出しちやあ、十本の指をばら／＼と開いて、恚う  
搔分け、搔分け行く心ですな。

だからひたりと身近に寄つた、甚吾爺も、何か眞  
黒なものが私に絡みついたかと思つたのです。

（何だ、）

（何か、見えませぬか、旦那、）といひます。」

9

九

「私は其の面上へ襲つて來る、動く間を搔拂はう



として、水を浴びた時のやうに、平手で顔を一撫

《なでたです。

而して瞳を定めたけれど、何を見ようといふ當もなし、闇中に色の薄い處さへないくらゐであつたですから、

(何も見えぬな)

(敵、敵、敵めが、トやつてすぼんと控へて居られまするてや、)

爺肩を窄め、腰を屈めて、青鷺のゝんだ姿をして見せたやうでありました。

夜巡は年來闇に馴れて、何分かのゝあいるが分ると見える。

(はあ、よく知れるな、居るか、些とも分らないが)

(何も、此方の冷汗で知れるでござります。長首を据ゑて嘴をむつと、動きませぬやうな目でじろ／＼と睨めまする時は、其の六尺居まはりへ參つたものゝ、腋の下から汗がたまはして、慄然としまするに因つて知れるでござります。

其處そこでおいでやつたと得物えものを振ふるでござりますが、  
もう敵えてがじつとして居をりますなら、此この六尺棒しやくぼうの端はし  
は、盲目打めくらうちにいたしても、何處どこへか打附ぶつりまする寸すん  
法ほうでござりまする。

旦那様だんなさま、今いま一羽飛上はとびあがらせて、其その證據しょうこをお目めに  
懸かけうぞ。 )

どう／＼と足踏あしぶみして棒ぼうを突鳴つきならしながら甚吾じんごは叱しつ！

(あれ、御覽ごらんじ、腹立はらだちやの、人間にんげんが間遠まとほぢやと心こゝ  
得ろえて歩行あるき出だしもしませぬわ、憎にくさも憎にくし、畜生しやう、  
おのれゆる  
汝許おのれゆるさぬぞ。 )

と居合腰ゐあひこしに向顛卷むかづはぢまきで、つか／＼と出でて、大薙おほなぎに横よこ  
に拂はらつた。

(曳えい！ )

(は ) と私思わたくしおもはず呼吸いきを吐ついた、一道だうの風かぜ、空そら  
ざまに暗やみを裂つんざいて、寝衣ねまきの袖そでが揺ゆれたです。

(遁にげたな )

(三間げんとは退のきませぬが、おのれ )  
ずる／＼と甚吾足じんごあしをずらして出でて、

(曳えい！ や！)

(遁にげた)

又また空そらから倒さかしまにものが地ちに生はえたやうな氣け勢はひがする  
です。

(曳えいや！)

(は、遁にげた) と手て探さぐりで、思おもはず呖つぶやく、自じ分ぶん  
ながら間まの抜ぬけさ加か減げんといふのがないです。

例れいの暗あん中ちゆうを流ながるゝ、形かたちのないむらゝは、頻しきりにま  
つげにからまるから、泳およぐやうな手て附つき、今いま思おもへばお  
話はなしをするのも可を笑かしい、極きまりが悪わるいやうな氣きがするです  
が、其その時ときは係かかり合あひ、狂きやう人じん走はしればで夢むちゆう中ちゆうだつたですよ。  
然しかも其そ處こに現げん物ぶつが現あらはれて働はたらいて居ゐるんですから。

甚じん吾しが引ひ摺きずられたやうに曳えい、や、を何なんと七八べん遍べん、  
打うちそらし、打うちちそらしする中ちゆうには道みちも一ちやう町ちゆう足たつらず歩あ  
行ゐき出だした。あとから、進すすむともなしに、件くだんの搔かき分わ  
けるやうな、泳およぐやうな手てつきで、間まの抜ぬけた　ー  
は、遁にげたか　ー　遁にげたかを繰くり返かへしながら、  
下したツ腹はらに力ちからなく、浮うき足あしで、とぼ／＼と後あとについて行い

つたですが、探りに出す手が、ざらりと立樹の皮を  
掴んだから、

（待て、待て）

（はい／＼） といつて甚吾は大呼吸を吐いて停  
りました。

（こりや何處だ） と聞いた時、何となく身のま  
はりに重い沈んだ風が吹いた、一面の水の臭、心地  
草履で踏んだ地もびちや／＼と鳴るやうで、扱は最  
う大池かと思ふと違はず。

（やあ、こりや畳みかけて追ひこくる中に、何時  
の間にやら参りましたわ、大池でござります。）  
（今夜はよく女の裾にならなかつたな。）

（はい） といつて甚吾爺きよんとして氣拔が  
したやう。」

## 九

「私は其の面上へ襲つて来る、動く闇を搔拂はう  
 として、水を浴びた時のやうに、平手で顔を一撫

《なでたです。》

而して瞳を定めたけれど、何を見ようといふ當も  
 なし、闇中に色の薄い處さへないくらゐであつたで  
 すから、

(何も見えぬな)

(敵、敵、敵めが、トやつてすぼんと控へて居ら  
 れまするてや、)

爺肩を窄め、腰を屈めて、青鷺のイんだ姿をして見  
 せたりやうでありました。

夜巡は年來闇に馴れて、何分かものゝあいろが分  
 ると見える。

（はあ、よく知れるな、居るか、些とも分らないが）

（何も、此方の冷汗で知れるでござります。長首を据えて嘴をむつと、動きませぬやうな目でじろ／＼と睨めまする時は、其の六尺居まはりへ參つたものゝ、腋の下から汗がたまして、慄然としまするに因つて知れるでござります。

其處でおいでやつたと得物を振るでござりますが、もう敵がじつとして居りますなら、此の六尺棒の端は、盲目打にいたしても、何處へか打附りまする寸法でござりまする。

旦那様、今一羽飛上がらせて、其の證據をお目に懸けうぞ。）

どう／＼と足踏して棒を突鳴しながら甚吾は叱！  
（あれ、御覽じ、腹立やの、人間が間遠ぢやと心得て歩行き出しませぬわ、憎さも憎し、畜生、汝許さぬぞ。）

と居合腰に向顛卷で、つか／＼と出て、大薙に横に拂つた。

(曳！)

(は) と私思はず呼吸を吐いた、一道の風、空  
ざまに暗を裂いて、寝衣の袖が揺れたです。

(遁げたな)

(三間とは退きませぬが、おのれ)  
ずる／＼と甚吾足をずらして出て、

(曳！ や！)

(遁げた)

又空から倒にもものが地に生えたやうな氣勢がする  
です。

(曳や！)

(は、遁げた) と手探りで、思はず呟く、自分  
ながら間の抜けさ加減といふのがないです。

例の暗中を流るゝ、形のないむら／＼は、頻にま  
つげにからまるから、泳ぐやうな手附、今思へばお  
話をするのも可笑い、極が悪いやうな氣がするです  
が、其の時は係合、狂人走ればで夢中だつたですよ。  
然も其處に現物が現れて働いて居るんですから。

甚吾が引摺られたやうに曳、や、を何と七八遍、  
打そらし、打ちそらしする中には道も一町足らず歩  
行き出した。あとから、進むともなしに、件の掻分  
けるやうな、泳ぐやうな手つきで、間の抜けた　ー  
は、遁げたか　ー　遁げたかを繰返しながら、  
下ツ腹に力なく、浮足で、とぼ／＼と後について行  
つたですが、探りに出す手が、ざらりと立樹の皮を  
掴んだから、

（待て、待て）

（はい／＼）　といつて甚吾は大呼吸を吐いて停  
りました。

（こりや何處だ）　と聞いた時、何となく身のま  
はりに重い沈んだ風が吹いた、一面の水の臭、心地  
草履で踏んだ地もびちゃ／＼と鳴るやうで、扱は最  
う大池かと思ふと違はず。

（やあ、こりや疊みかけて追ひこくる中に、何時  
の間にもやら参りましたわ、大池でござります。）

（今夜はよく女の裾にならなかつたな。）



（はい）といつて甚吾爺じんごおやぢきよんととして氣拔きぬけが  
したやう。」

10

十

「其處そこで、目の前まへに大きな池いけ一ツ控ひかへたと思ふと、  
其の池いけは寒氣さむけがするまで多時しばらく、來きがけに腕車くるまを留とめ  
て見た事ことがあるですから、大略見當たいりやくけんたうが着いたんでい  
すな。

突當つきあたりが森もりと、それから左ひだりの方が大廻おほまはりに齊念さいねんの  
湯ゆへ通かよふ路みち、自分じぶんが通とほつた處ところとすると、今居いまぬる前まへが、  
彼あの時とき、二人ふたりの男をとこの釣つりをして居ゐた畔くろで、然さうすると

凭よりかゝつたこれは高たかくはないが繁しげつた松まつと、少すこしづゝ  
目星めぼしがついて來きた。

然さうすると、妙めうなもので、目めの前まへにむらゝする  
黒くろいものがなくなつて、退のくにも進すすむにも、足捌あしはきが  
出で來きるやうで、胸むなづもりで水みづの色いろも灰はい色いろに廣ひろく澤こん沌とん  
として暗夜やみの底そこに動うごいて居ゐるです。

( 鷲さきの行列ぎやうれつは一向かうに繰出くりださぬな。 )

( はい ) とばかりで爺おびい、二の句くが續つゞかぬですよ、  
何なんだか上うはづつて居ゐるやうで。

( 何どうした、最もう其處等そこいらに敵えてものゝ姿すがたは見みえない  
か )

( 皆目闇かいまくやみになりました。 )

( 一よこつ横よこなぐりを遣やつたら何どうか )

( 滅相めつせいな、お前様まへさま、今度こんど拂はらひますると、ソレ女をんなの  
裾すそがぼツと明あかるいのでござりますぢや。 )

( 得えものを貸かせ。おい、其その棒ぼうを己おれに )

( 何どうなされます )

( 故つにする。待まて、今いまぢや己おれの方ほうが何どうやら目めが

見えて来たやうだから、来た次手だ、もう些と水岸まで出て見よう。）

（まあ、お止しなされたが可うござりましょ、足の裏で、鱧を踏みますだけでも、好い心地ではござりませぬ。）

（構やしない） ツて爺の手から棒を引取つて、一ツ足許を突いて見て、づか／＼と出ると、背後から扱帯の結目に両手を縋つて、

（あゝ待たしやりませ、それぢやで申さぬことではない、なあ。）

（うむ） と私も氣を入れて言つたです、凡そ朽木の光もない中に、向う岸の、此方側と同一森の末の、過般墓場の趾と見た石塔の水に浸つて居たあたりで、色の鈍い、濁つた、たとへば煤ぼつた瓦のやうな而して其の明の輪廓の亂れた焰が、ぱツと水面から一尺ぐらゐ上で、燃えたんですもの、爺も私も確に見たです。

（彼か）

（えゝ、鷺が炎でござります） といふ中に、前とは二三尺離れた、岸を此方へ寄つた處で、赤くな

つた、はじめは握拳ほどの大きさに赤くなつて、密と措を開いた形で消えます。と又燃えたですな。

赤黒い火の心には、蒼い光が包まれて居るかとも思はれる。

三度目に二ツ出た。

と直に三ツになつたが、急にふら／＼とぶら下るやうに五ツ燃えたです、其の時は、水も五所にちら／＼と池が見えて、眞蒼な汀の菖蒲が、濡色に黒味を帯びて照らされたですよ。

光物は丁ど葉尖に顯れる、顯れるは今の五ツが一時にフツと消えて、更に燃えるまでには一寸間があつたです。

爺は溜息。

並んで五ツ燃えた其の端の一ツは、最初水浸の卵塔ではじまつた時から場所を考へると、汀を輪に廻つて、然やう、はや一町ばかりも私どもの居る方へ

近ちかくなつて來きたですから。

今こんど度見みえる處ところと、固かた唾つを飲のんでると、ずつと近ちかいて一いっせい齊せいに七ななツ點とれた、菖あやめ蒲めの葉はずれにさら／＼と燃もえ附つきさうな勢いきほひだけれど、水みづ茶屋ぢやの灯ともしびのやうに、ちら／＼水みづには映うつりはせぬです。」

1  
1

十一

「位置ゐちは矢張やはり、菖あやめ蒲めの上うへと向むかうを見みながら、私わたくしは我われ知しらず手許てもとの葉はを握にぎつて、便たよりのない眞暗まつくら闇やみに、自じ分の身み體だとも思おもへない兩方りやうほうの腋わきの下したへ、垂た々らと冷つめかゝつたのは、濡ぬれた葉末はすその雫しじくぢやなく、はじめ

知つた氷のやうな冷汗で。

（耳の附許のあたりから、針で刺されるやうに慄然としたです。

何うでせう、其の七ツ灯れた炎を見る目に、一所に脊の高い、女の姿が映つたぢやありませんか。唯影のやうな形とするには餘り明かで、又既に餘り其の距離が近いのであつたですな。爺がいつた裾はなるほど、明いほど、最う些と傍に来たら、縞がらも分らうと思はれる位、帯のあたりが暗くなつて、面長な倅がほのかに白い、心から蒼みがゝつたと見て取るのは免れません。但爺が言つたやうに、眉も目もない――旅人が河内國千破矢の古蹟、金剛山の薬研越で、ともすれば見るといふ、十六七の氣高い姫、元禄風の振袖、さげ髪、兩袖を胸にあてゝ、深々と差俯向いて、百合の香のこぼるゝばかり、二と留南木の薫して、擦違ふのが、必ず山の頂の方から來て麓へ通るのを、一文字に突抜けて、面も觸らず上れば可し、一足でも踏停まつて、あとを振向くと、彼方も屹と、立留まつて、下から仰いで振返る、顔には何も無い、雪を唯面長に束ねたやうな、めん

ない上臈と、聞えた山媛、一目見るものはもんどり打つて、千丈の谷に落ちるツていひます。――

ト同一やうな、目も眉もないものであるか何うか、其は確とは未だ知れないのであつたですが、いや、最う瞳に刻まれて、目前を去らない、其の姿は然も次第に判然と、褻のする／＼と動くのも定かになつて近づくですな。

(白蓮童子六萬菩薩、静まり給へ止動方角、白蓮童子六萬菩薩、静まり給へ止動方角)と囁りついて地を動かすやうに、沈んだ力ある聲で口の裡で、太郎冠者は危急な場合、慌てゝ念佛も忘れたか、荒馬を留める呪文を唱へて全然夢中。

容易でないのは、其の女が、胸さきを刃で抉られた、苦痛に堪へぬやうな、口を四角に歪めて、大變、鐵漿の黒々とした口を開けたと思ふと、炎の末の方から、すつと其の唇に吸はれたやうに消えて、池に向つた眞白な頬が、おくれ毛をかけたまゝ、明るくなると、つつと抜け出し、背後へ廻つて、瘦せた脊筋

の邊でばツと燃える。

此の明でも一人居るのが見えたです。凡そ水の底に幾年かを経たといふばかり、世にもしよんぼりとした鼠色の小袖に、青ざめた襟をかさねて、撫肩を細く、胸を片袖で緊乎と抱いて、頤を襟につけて差俯向いた、白い片手を、他愛のないものゝやうに出したのを、前へ立つたのが、うしろ手に取つて、導いて来るんですが、件の炎は、又、うしろの、小造な、女の口の邊で、すツと消える。暗の中へ、更に姿二つ黒く劃つて、色を、青く、一人は、鼠に、裾と袂を朦朧と描いたですよ。

口を歪める、炎が吸はれて、フツと赤くなつて直に暗い、再度此の鐵漿を見せられた時は、其の目鼻のあるなしに係らず、私膚が粟立つたです。

途端にな、足許で、ぶツノ、といふ豪い泡が、鱧、でせう？ 鰻でせう？ 鯰でせう？ 炎が貴下、放れて一ツ池の中心へ燃えました。



女をんなは二人ふたりとも立停たちどまつた、もう此時このときさきが立停たちどり  
ませんかつたら、私わたくしは棒ぼうを棄すて、遁にげ出だしたに相違さうゐ  
ないです、直すぐ、ものをいへば聞きえさうな近間ちかまに來きた  
ぢやありませんか。」

1  
2

十二

「何も彼かも一いっしよ所じよだから順じゆんが悪いわる、一度いちど女をんなの姿すがたを見み  
てからは、他事たじを言いふ違いとまはなかつたですが、彼あの青あを  
鷺さぎの呼吸いきは、五いっツ、三みツ、七なツづ、絶たえず燃もえて  
は消きえ、消きえては燃もえ、はじめは一ひとツ二ふたツ三みツと、  
慥かう、」

いひかけて榊原は、火箸を抜いて圓の四分の一の線を描き、

「其の池なかに一ならば、いかさま爺の言が眞なら、青鷺が一行に並んで、交る／＼、炎を吐いては、菖蒲の根にくつついて、つながつて寐て居る魚を、漁るやうに見えましたが、數が増して、五ツになり七ツになつてからは、時とすると、巴形に入違ひ、上下に亂れて燃えたです。」

絶えず其の明があつたゝめに、する／＼する／＼と來る姿を續けて見たのに違ひないです。

而して、年増がゆがめる鐵漿の口を仕切つて、前で消え、後に燃え、其處で又消えると更に先達の女の褸の邊が燃ゆる工合であつたんですから、何の事は無い、女二人は交る／＼、一ツづゝ炎を吸つては一步來り、炎を吸つては二歩進むといふやうな次第、固より吸ふくらみだから吐くですな。

要するに其の女を、爺の説の如く青鷺の精だとすれば、それまでだけれど、鬼か、人か、別にものが

あるとすれば、鷺のイんだ間を縫ひ／＼歩いたの  
です。

さあ、今、間近になつて、立停まると、其時、一  
ツ遠く放れて、大池の水の凸なあたりで、根のない  
浮草が風に吹かれて漂つたやうに赤くなつたのを、  
前の年増は立つたツ切、背後に居た小造な方が、  
■ 娜な胸を反して、裾を包んだ菖蒲の葉越、池の上へ  
半身を曲げて出すやうにして、炎を熟と見詰めた氣  
勢で、首を伸ばすと凄いほど美しい顔の正面が見え  
たです。

黒髪も高く結上げて、胸も膨かだと見て取る途端  
に、離れちや居るが、ぴたり、私と面が向合ふ状に  
なつた。

一生懸命、おのれ嘴が長からうと瞳を据ゑると、  
何うでせう。目が眞赤になつた、爺の顛巻が淺黄に  
見えて、すんと細長い石の黒いものが頸を掠つて  
飛ぶから、はツとすると、細くあはれな聲が悲しげ  
に長く水に響いて、然も慌しげに、

(あれえ！ 榊原……)

様と言つたか、やい、といったか、馬鹿にして殿  
とでも申したか、唯自分の名を件の女の口から呼ば  
れたとひとしく、耳がグワンとして、水草が顔を撫  
でた。

私は倒れたでせう。

やがてむんずと、腕を握つたものがあるから、扱  
は爺が扶け起して呉れたのだらうと思つたですが。

鬱した調子で、

(来さつせえ) と其まゝ引立てられた時は、全  
然別人であることを覺つたです。

而して何ういふわけか、自分を捕へた者は、過般  
腕車で通りがかりに此の大池を視めた時、背後向に  
田舟に乗つて、舷から眞俯向けに水を覗いた、煙に  
似た黄昏の形を、あゝして地獄を覗くのだと思つて、  
厭な心持になつた其の男に他ならぬと、咄嗟に考へ  
て最う失望したのです。」

恚う語られた時は私も我ながら身の毛がよだつた、  
別に理由はないのである。

「恚ういふと、お笑ひなさいませうが、其の時は

眞個。

それでありますから、其奴に引摺られるやうにして、暗がりの中を、ぴしよ／＼溢れた水に、爪さきを舐められながら連れて行かれる中は、池の上を渡るやうにも覺えて、夢心地にも、やがてあの田舟にのせられて、倒に卵塔場の底へ突落されると、其處に冥土があつて、先刻の女たちが棲んで居るのであらうと、憶測に違はず、鸞の灯でない、灯が目を射たから、心付くと、廣い土間、高い天井、隅々には草が生えて、しつとりと冷い。屋根の上か、其とも地の中か、露が流れるか、雫が降るか、しと／＼しと／＼と水の湧く音がした。私は地の底へ入れられたと斷念めた、朽ちたが黒光のする玄關に、行燈を置いて、其の蔭に薄暗く、女が一人立つて居るから、勝手にしろと、背を向けて、どつかり腰をかけたですが、背を襲うて冷い人膚が蔽れかゝるやうでした。

此の天窓から啖ふのかな、あの黒髪が項を捲くのが、呼吸の根の留る合圖であらうと、首低れて居ると、私を連れて來たのが、これも老寄で、ちよん鬘を結つた奴、盥を持つて來て、土間に据ゑて、私の

足を頂くやうにして洗足をしてくれた。横へ来て式臺に手を支いて、

(何うぞ、此うおいで遊ばして) と立上りざまに行燈を宙に高く提げてすツくり圓鬚の項白く立つたのは、見覚えのある脊の高い一件でせう。

ぬうと上つてから、私の裾を下したですな、拗ねたといふ身で、づん／＼、間を幾つか、中には大板敷などを通ることあつて、十疊ばかりの廣間へ入ると、天井の高い事。

此の天井の高いだけ、それだけ深く、自分は地の底に引入られたのだと思つたです。床の間の正面に、白木の三方、何にも載せてないが、飾つてあつて、右手に鹿角の、巖い刀かけ、刀はなしに横に倒れて居た、左手の壁に凭せて、鐵小實、黒革絨の鎧一領、居丈高に飾つてある、此の背後の眞黒な壁から、若い女が、目のない顔を出すのだらうと、觀念しながら、豫め敷いてあつた蒲團の上へ、其へといふまゝに私は整然と坐つたですな。

次の室に裳の音して、襖越橘の香がすると、年増は  
ずツと下つて、脆いて靜に開けた。

中に白百合の姿が、鬱金の扱帯の色が目立つて、  
其のまゝ、崩折れて敷居の上に凋れ伏した。

「貴下、」

と榊原は私を膽り、

「爾時ほど美しい、私の許嫁を見たことは前後な  
いですが、尤も其までに一二度より逢はんのではあり  
ましたが。」

「え、」

「ですが、渠は盲目なんです、風限とかいふので、  
十六の時、兩眼とも明を失したんです、年増の女は  
私の知らない其の娘の乳母でした。」

に關すればといつて、榊原は口をつぐんだが、前を  
察し後を尋ねて、略其の所以を解し得た。

榊原の許嫁は、盲になつてから、恥ぢて人に見え  
なかつた、また、年の若い學生も、めくらの女は厭  
はしくツて、見棄て果てる氣で、音訪もしなかつた、

渠等は二人とも、福井の名家と豪家である。

「女は世にながらへる效もなく、其ほどより親なる人が、別邸にするとして、買入れたまゝ、未だ修復をしなかつた、齋念の森の庄屋の邸あとに、乳母と二人で引籠つて、此處で常磐木の落葉とゝもに、長へに埋れ果ようとしたのであつた。

番人に雇うた親仁が、甚吾爺が榊原にした如く、雨の徒然に青鷺の怪火を語ると、物狂しい女は、あはれ、日の光にはものを見ずとも、然う世を放れたやうな、おどろ／＼の状は、いとせめて言ひたる目にも見えようからと、乳母を促すので、辭みおほせず、泣く／＼手を取つて夜な／＼池の汀にイむうち、心の迷か、青鷺の炎、あれ／＼彼處にといふ内に榊原の姿を認めた。

あはれ言いくらか目にも見ゆる君、其の切なる心を察してと、乳母に泣かれ、女に縋られ、さ榊原は眼を閉づること半時にして、其の妻たるを許したのである。

七年を過ぎたといふ、此の物語を私は銚子の曉鷄



館<sup>わん</sup>で雨<sup>あめ</sup>の夜<sup>よ</sup>に聞<sup>き</sup>いた、齋<sup>さい</sup>念<sup>ねん</sup>の鑛<sup>くわ</sup>泉<sup>せん</sup>の家<sup>いへ</sup>の建<sup>たて</sup>方<sup>かた</sup>が、能<sup>よ</sup>く彼<sup>か</sup>處<sup>しこ</sup>に似<sup>に</sup>て、然<sup>しか</sup>も小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>原<sup>ばら</sup>の彼<sup>か</sup>方<sup>なた</sup>の新<sup>しん</sup>池<sup>いけ</sup>といふさへ、花<sup>は</sup>菖<sup>あや</sup>蒲<sup>めそ</sup>其<sup>その</sup>の趣<sup>おもむき</sup>に異<sup>こと</sup>ならずとかや。

浪<sup>なみ</sup>の音<sup>おと</sup>、松<sup>まつ</sup>の風<sup>かぜ</sup>、雨<sup>あめ</sup>の小<sup>こ</sup>留<sup>やみ</sup>に燈<sup>とも</sup>暗<sup>しび</sup>く、夜<sup>よ</sup>はハヤ一時<sup>じ</sup>に近<sup>ちか</sup>い。

「酒<sup>さけ</sup>が冷<sup>つめ</sup>うなりましたが、お話<sup>はなし</sup>の二<sup>を</sup>の音<sup>おと</sup>も聞<sup>き</sup>えません、女<sup>ぢよ</sup>中<sup>ちゆう</sup>どもは皆<sup>みな</sup>寐<sup>ね</sup>たでせう。」

「丁<sup>ちやう</sup>ど恚<sup>か</sup>ういふ晩<sup>ばん</sup>でした。」

雨<sup>あま</sup>戸<sup>と</sup>の外<sup>そと</sup>を夜<sup>よ</sup>巡<sup>まは</sup>回<sup>り</sup>の拍<sup>ひ</sup>子<sup>やう</sup>木<sup>しぎ</sup>カチカチカチ。

榊<sup>さかき</sup>原<sup>はら</sup>は其<sup>その</sup>時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>はなかつたといふ、髯<sup>ひげ</sup>を撫<sup>な</sup>で、莞<sup>くわん</sup>爾<sup>じ</sup>として、

「忘<sup>わす</sup>れました、甚<sup>じん</sup>吾<sup>ご</sup>爺<sup>ぢい</sup>は、池<sup>いけ</sup>から這<sup>は</sup>上<sup>あが</sup>つて遁<sup>に</sup>げたといふです。」

【完】

